

vi. 小宝島での取り組み

小宝島実習生 中井健博

はじめに

面積・人口規模とも、トカラ列島最小（少）であることと、分校の休校と再開の歴史を持っていることに魅力を感じて、実習の前年に本研究会を立ちあげた当初から、小宝島で実習をすることを希望していた。小宝島の先生方、児童生徒、住民の皆さま、十島村役場の関係者の皆さま、そしてトカラ研究会のメンバー各位に、心から感謝する次第である。

実習期間は2006年9月9日～20日であったが、その半月ほど前の同8月23日～25日に、実習校への事前の挨拶と、実習授業の教材開発のため、私は小宝島を訪れた。その際、幸運にも小宝島分校の職員研修（郷土史）に同行させて頂き、本番の実習で行った中学校社会科のオリジナル授業「小宝島の港」の具体的な構想を描くことができた。また小宝島訪問前日の同8月22日には、小宝島分校の本校にあたる宝島小中学校に赴き、该校の実態と分校との関係についてご教示頂いた。

実習校は小中併設校であるが、私は中学校で実習を行った。授業実践は、中学校社会科を中心にさせて頂いた。しかし小中学校合同で行う体育や給食、清掃活動、学校行事、放課後の活動などを通して、日常的に小学生と関わる機会は多かった。

1. 小宝島について

（1）小宝島の自然と暮らし

小宝島は、「隆起サンゴ礁でできた列島最小の有人島」であり、海上からは、妊婦さんが横たわっているように見える、まさに「子宝」の島である。

島内にはアダンやビロウが生い茂り、亜熱帯情緒があふれている。またサンゴの露出した原野に牛が放牧されている風景も、特徴的であった。トカラハブ（奄美のハブより毒性は弱い）の北限地でもある。



小宝島の遠景



小宝島港に入港する村営船

周囲 4.74km, 面積 1km², 人口 49 人(2006. 7 末), 最高点は「竹の山」の 103m である。島内一周道路 (2km) は歩いて 30 分ほどで、一周できる。島民は全員が顔見知りであり、2006 年 9 月 18 日の敬老会では 49 人中 40 人以上が参加し、70 歳以上のお年寄り 6 名の長寿をお祝いした。

日本において最後まで、島と、沖合いに停泊する定期船との間を行き来する舢舨 (はしけ) による接岸作業が行われていた。1990 年 4 月、現在の接岸港 (小宝島港) が完成して定期船が直接乗り入れられるようになったが、舢舨時代を中心港「湯泊」には、今も温泉が湧いている。シュノーケリングすると、海底からも湧いているのがわかった。この海水温泉から塩を精製して成功した I ターン者が在住する。島内には清涼飲料の自動販売機が 1 台あるが、小売店は無い。生活物資は、本土からの生協便で調達している。

島は隆起サンゴ礁から成り、かつ狭小なために水源に恵まれず、かつては「竹の山」にある貯水池や各家の貯水タンクに天水を溜めて、生活用水を確保していたが、2002 年に海水淡水化装置が完成してからは、上水の事情は格段に向上した。



小宝島の地図

出典：十島村役場ウェブページ

<http://www1.tokara.jp/contents/profile/takara.html>



南風原牧場 (右奥の巨石は「赤立神」)



トカラハブ (村営住宅付近)



湯泊 (左奥は小島)



敬老会 (9.18 離島住民生活センター)

（２）宝島小中学校小宝島分校の教育体制

実習時点における、児童・生徒の在籍数は９名（小３名，中６名）であり，全９名中，山海留学生は５名，教員子弟は３名であった．なお前年度の在籍数は５名であった．

学級編成は，小二（１名）・小三（１名）は複式，小五（１名）は単式，中一（３名）と中二（３名）は同一のHRだが，学活や道徳授業を除いて，授業は全く別であった．

教職員は６名（４０代２名，２０代４名）で，学校長は常駐せず，年３回，宝島の本校より来訪するとのことであった．

小・中学校とも制服はなく，体育服も学校指定のものはなかった．しかし身だしなみや生活習慣，清掃活動等の指導は，在籍数が少数ということもあって細かく行き届いていた．登下校の際に，（児童・生徒によってはいくらか遠回りになる）正門を通ることが義務づけられていたことは，その象徴である．社会規範を学ぶための限られた機会を有効に活用しようとする当該校の意志を感じた．また島内に医師が常駐していないため，必然的に予防的な指導を行わざるを得ず，特に養護教諭を中心とした給食後の歯磨き指導は徹底していた．大人，子どもを問わず，校内にいる人間の絶対数が限られているため，清掃活動は教職員も貴重な実働力として子どもたちと一緒に動き，自ら範を示しながら指導していた．



宝島小中学校小宝島分校



特別活動室で実習生お別れ会（9.19）

校舎は一階建てであったが，これは強風対策のためと思われる．また小学校と中学校の校舎は分かれていて，これらとは別棟に給食室がある．給食は，児童・生徒と教職員の全員が一堂に会して食べている．体育館は無いが，屋内体育活動や行事等で使用する「特別活動室」がある．学校のすぐ東側には，家の下（えのした）海岸がある．サンゴ礁の磯は表面が意外に鋭利で危険なため，児童・生徒は，子どもたちだけで島内の海岸線に出ることを慎むよう学校から指導を受けていた．

小宝島分校は，1979～1987年度の９年間，在籍数減のために休校した歴史を持っている．休校中の一時期，島の総人口が２０人を割り込み，コミュニティーの存続が難しくなったことがあったが，1988年度より児童２名で再開し，現在に至っている．

2. オリジナル授業

(1) 学習指導案

社会科地理分野 学習指導案

指導者： 中 井 健 博
 学年・学級： 中 学 校 第 1 学 年
 場 所： 宝島中学校小宝島分校のHR教室
 日 時： 平成18年9月11日(月)第2校時

1. 単元主題 「小宝島の港」

(中学校社会科地理分野の地域調べ学習)

2. 単元設定の理由

(1) 教材観

現行の学習指導要領では、小中学校の教科指導における教授すべき情報量が大幅に減り、代わって探究心を育み、自ら学ぶ意欲を持たせるための教育成果が期待されるようになり、中学校社会科においては以前にも増して「調べ学習」に重点が置かれるようになった。そこで、身近な地域を探索することにより、生徒の郷土および居住地に対する関心をいっそう深めることができるのではないかと考え、単元設定した。

単元の主題は、日本で最後まで行われていた小宝島の舁（はしけ）作業の旧港を分析することである。16年前の1990年4月に、現在の小宝島港が完成して村営船が直に接岸できるようになるまで、島幅が狭く偏平ゆえに風の影響を受けやすい小宝島では、沖合に停泊する村営船からの舁を迎え入れるに際して、様々な風向きに対応するため5つの港を有していたが、これらの旧港の現況と当時の様子を探りながら、かつての島のコミュニティーをイメージしようとするものである。これらを調べる過程で、生徒が島の古老に聴く機会も想定しながら、彼らに「探検」する気分で島の歴史的遺産に触れてもらうことをねらった。そしてこれらの過程を通して、島への愛着を育み、島を空間的にも時間的にも広く観ることの大切さを習得してもらうことを目的とした。

村上佳代・後藤春彦・山崎義人「小宝島における島暮らしの変化と都市的生活の流入に関する研究・その1（食生活の調査）&その2（生活時間・行動範囲調査）—離島の地域生態—」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』1996年）の論文で指摘された、子どもを含めた外来島民の島内における行動範囲の限定性を踏まえて、この項目の授業を預けて頂けることに使命感と責任を感じて、この授業に取り組んだ。

参考までに、トカラ列島の村営船接岸（舁作業からの解放）の歴史を、以下に掲げておく。

中之島・1968年、宝島・1975年、口之島・1976年、悪石島・1977年、平島・1980年、諏訪之瀬島・1983年、小宝島・1990年。

（２）生徒観

まず小宝島分校の中学校社会科の授業は、一年生と二年生に分けて行っており、複式授業は行っていない。教科書も別である。

本授業の対象は、中学校一年生の３名である。このうち２名は同年４月から山海留学生として当該島に来訪し、この時点で在島期間が４ヶ月を過ぎた頃であった。残る１名も小学校高学年から在籍した生徒であった。つまり本授業を行うにあたって、前年度までに该校で行われた地域調べ学習の成果を前提にすることは難しかった。また新年度以降、地域調べ学習は特には行っていない（予め、この９月に行う計画であった）ということであった。一方で、島内の数箇所が存在する学校菜園や、水泳授業で島内の赤立神海水浴場に赴くなど、正課授業において校内を離れて活動する機会に恵まれたことは、该校に在籍する子どもたちにとって、自ら住む島への愛着を深めるのに少なからず有益であったと思われる。しかし危険防止のため児童・生徒は、自分たちだけで島内の海岸線に出ることを慎むよう学校から指導されている。また陸地においては毒性のトカラハブが出没するため、子どもたちは意外に島内の限られた区域（集落・学校・接岸港とそれらを結ぶ道）で日常生活を送っている感がある。

正課の授業において、事前学習の成果を踏まえて島内をフィールドワーク（巡見）することにより、多くの「気づき」を与え、日常生活の中から探究心や科学的精神を培い、自らが居住する島への愛着を持てるような子どもを育てたい。

（３）指導観

教材だけでなく指導法にも、少人数校及び小規模離島ゆえのオリジナリティーを迫及できる環境にある。教室内での授業では、少人数であることを活かして発問・応答形式を多用しながら一人一人にきめ細かな指導を行うことが可能である。島内の巡見においても、小規模離島ゆえに限られた時間の範囲内で多くの地点を見てまわることが十分に可能な状況にある。この当該島における最高の利点を活かした授業を実践することに対して、使命感をもって臨む姿勢が必要である。また写真と地図を多用して、生活空間に近い見慣れた風景を静止して考えさせることにより、客観的な思考力及び分析力を育むことを期す。

３．単元の目標（評価の観点）

（１）関心・意欲・態度

小宝島にやってくるときに誰もが利用する船と港について、今から１６年前までは島への上陸風景が大きく異なっていたことを紹介し、単元の主題が非常に身近な事例であることを示して、身近な地域・小宝島に対する学習意欲を高める。「自分の目で旧港の現況を確認したい」、「当時の舳作業の実態がどのようなものであったのか、島の大人に聴いてみたい」という気持ちにさせることが目標である。最終的にはその延長上に、今現在と舳接岸時代のコミュニティと生活環境の差異を比較・考察する態度を養いたい。

- 自ら能動的に旧港の現況を確認し、舳の接岸作業を経験した島の大人に話を聴いたか。
- 今現在と舳接岸時代の生活環境及びコミュニティの差異について、考えが及んだか。

（２）思考・判断

使う頻度が最も高かった旧港はどこか、反対に最も使うことが少なかったであろう旧港はどこか、それらは旧港のどの部分を観たらわかるのか等、観察すべきテーマを設定することにより、着眼力及び分析力を養う。これらの判断の材料は、島での生活体験である。風の強さや向きによって船の航行が影響を受けること等を、体験的にどこまで感じてきたかがポイントになる。

- 旧港の現況を観察して、利用頻度の高い港とそうでない港を判別できたか。
- 風向きの影響から、どの季節にどの港をよく利用したか、仮説を立てられたか。

（３）技能・表現

授業中の発問に対する回答だけにとどめず、単元を通して毎時間、記入式の教材プリントを配布し、その都度回収して全生徒の着想や関心の度合いを文書上から把握するように努め、各自に発想力の向上を求める。生徒自身の言葉で書かれていることに意義がある。

- 舳接岸時代の具体的なイメージや疑問点を、自らの話し言葉で表現できたか。
- 舳接岸時代の具体的なイメージや疑問点を、自らの書き言葉で表現できたか。

（４）知識・理解

事前学習や巡見、TV映像等を通して、島内５つの旧港の現況と当時の舳作業の実態を把握することを目標とする。

- なぜ昔は、村営船を接岸させずに舳を使って接岸作業をしていたのか、理解できたか。
- 小宝島における舳作業のあらましと、５つの旧港の位置や規模を把握できたか。

４．単元の流れ

授業段階	配当	授業内容
導入	1	実習生の自己紹介。舳作業及び小宝島特有の事情を紹介。＝本時
巡見	2	湯泊→口の泊（城之前漁港）→セドーの泊→ツクリ泊→中西の泊。 ＊中学校一年生（３名）と共に、二年生（３名）も同行。
展開１	1	トカラの船運事情を描写した、椋嶋十『悪石島の少年』を講読。
展開２	1	NHK番組『新日本紀行 黒潮列島 鹿児島県トカラの島々』視聴。
まとめ	1	これまでの学習成果を２種類の用紙に記入。舳時代の島の共同体社会をイメージして終了。

５．本時の実際

（１）本時の目標

小宝島の位置や面積を確認した上で、かつての舳作業の存在と当該島における舳作業の必然を紹介し、当該島独自の事情や舳接岸に利用された島内の旧港を把握させる。

教材として、大判の日本地図、大判の小宝島地図、旧港を写した大判写真、旧港を判別するための空中写真（1978 年度撮影。生徒に進呈）、自己紹介用の兵庫県を写した写真を用意し、それぞれ具体的なイメージを持てるように努める。

本時は、この翌日に予定している巡見のための導入授業である。

(2) 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	指導上の留意点
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者の自己紹介（関東出身）. ・兵庫県及び兵庫教育大学紹介. ・日本地図で兵庫県と鹿児島県を確認した後、小宝島の位置を確認. ・小宝島への渡航手段が船のみであることを確認し、単元主題「小宝島の港」を提示. 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習生の話す言葉から「関西弁を話さない関西人」を体感する. 異文化に触れる第一歩. ・県外のことを自分がどれだけ知っているのか、自己評価する. 	<ul style="list-style-type: none"> ・直前の全校朝礼での挨拶内容を踏んで自己紹介. ・自己紹介等では極力、時事問題を入れるように努める（兵庫県西宮市における夏の甲子園大会・優勝投手のハンカチ王子など）.
展開 I 20分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> 今から 16 年前まで、村営船は小宝島に接岸していなかった。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・「ここは日本で最後まで舁作業を行っていた島」 ・舁作業の概略. ・空中写真を配布し、海岸線の地形などから舁接岸時代の旧港を探す。 →生徒の発表. ・5 つの旧港（湯泊・口の泊・セド一の泊・ツクリ泊・中西の泊）を提示する. 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業展開に合わせてプリントに、書き込んでいく. ・なぜ大型船は島に接岸できなかったのか、考える. ・地形上、港がどこであったのかを推測し、その地点を発表する. 	<ul style="list-style-type: none"> ・書き込み式のプリントを配布. 授業の展開順に項目が挙がっている. ・大判写真を適時的に示し、「探検」的な気運を高める. ・配布写真を用いて、一般的な港の条件についても考えさせる（入り江、水深の深さ）.
展開 II 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・小宝島特有の舁接岸事情. ・「風の影響を受けやすかったが、それはなぜか？」 ・「舁で牛を運んだ映像があるが、いったいどのように運んだのか？」 ・5 つの旧港のうち、最も使う頻度の多かった港、少なかった港を推測する. 実際に旧港のどこを観たらそれが判断できるのか、考える（港と、港までの道の整備状況など）. 	<ul style="list-style-type: none"> ・小宝島の舁接岸港が、十島村の他の島より多かった理由を考える. ・舁は人だけでなくモノの運搬も担っていたことを受け留める. ・とりあえずの仮説を立て、旧港のどこを見たらよいのか、当時の舁作業を想像しながら考える. 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の舁作業の状況を思い描きやすいように、臨場感のある描写を心がける. ・牛の運搬法は、島の大人に訊いてくるように促す. ・現地を視察するにあたっての着眼のポイントを考えさせる. テーマを持って観察することで、より深く分析できることを示す.
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・次回巡見時に使用するプリントを配布して、本時の内容をまとめる（本授業で黒板に貼付した、5 つの旧港の同じ写真が載っている）. ・次回巡見の連絡. 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントで本授業の成果を確認しながら、次回巡見への期待を高める. ・自分たちの島を、近い過去を掘り下げることによって、改めて見つめ直す. 	<ul style="list-style-type: none"> ・巡見前に、本授業やプリントを基に、意欲を高めることを期待する. ・日頃生活している身近な地域で、「宝さがし」をするような雰囲気をつくる.

(2) 実践報告

本単元「小宝島の港」授業のその後

「小宝島の港」授業は、この後も続いた。本授業の翌日、9月12日の第5～6校時の2時間にわたり、予定通り、巡見を実施した。5つの旧港と共に、城之前漁港の陸の上に2艘現存しているかつての舩（しょうほう丸、小宝丸）を確認した。この巡見の様子は、鹿児島県の地方紙『南日本新聞』9月17日付朝刊に、記事として掲載された（後掲）。



中学社会「小宝島の港」の第1回授業（9.11）



小宝島の航空写真（1978年度撮影）

出典：国土地理院・空中写真閲覧サービス



〔巡見Ⅰ〕 分校を出発（9.12）



〔巡見Ⅱ〕 湯泊（9.12）



〔巡見Ⅲ〕 城之前漁港に現存する舩（9.12）



分校の職員研修（郷土史）で訪れたセドーの泊（8.24）

当初計画では、巡見後の「小宝島の港」授業は1時間分のみであったが、台風接近のため予定していた児童生徒の検診が、医師が来島できないために中止になったことと、私自身が島から帰れずに実習期間を延長して頂いたことで、計2時間分、同じ単元の授業を追加することになったのであった。つまり巡見後に本単元の授業を3時間、行ったことになる。私にとっては結果的に、念には念を入れて教材開発をした甲斐があったといえた。「追加」する形となった授業では、実習出発前には全く想定していなかった教材を二つ、使用

した。一つは椋鳩十の随筆『悪石島の少年』（1952年）、もう一つはNHK番組『新日本紀行 黒潮列島 鹿児島県トカラの島々』（1969年4月7日）である。前者は、鹿児島県入りして最初に実習生全員と訪れた、姶良郡加治木町の椋鳩十文学記念館で偶然に見つけたものであった。椋は、トカラ列島がアメリカから日本に返還された1952年に、現地を訪れていた。同記念館には、その時の椋の取材メモも現存していた。また後者は、実習本番で小宝島に入ってから島の総代から借り受けたものであった。事前の訪問でも、実習で来島した後も、私は教材を求めて島の方々の話を聴くように努めたが、「教材探し」という目標を離れて、このヒアリング自体が私には興味深い作業であった。島の方々と懇意になるきっかけにもなり、舩の話題を端緒として、その方の個人的な島に対する思い入れを聴くことができた。NHK番組は、島の総代と懇談している中で、「そんなに興味があるのなら、見てみるか？」と声をかけて頂き、総代のご自宅で視聴した後に急遽、授業に採り入れることを決めたものであった。1969年当時のトカラ列島を映したこの番組の大半は、小宝島を描写しており、実際に湯泊港から舩で、沖に停泊している村営定期船（当時は253トンの第20島丸）に向かう場面があった。視聴した生徒たちは、舩の臨場感とともに、親船である村営定期船（現在のフェリーとしまは1,389トン）の小ささにも驚いていた。また牛を運搬するにあたって、舩の船べりに牛の頭部をくくりつけ、海中を泳がせていた場面があり、何とも筆舌し難いものがあった。小宝島だけでなく村営船の船員からも事前に話では聴いていたが、映像で視聴したことで、さらに強烈な印象を残した。番組視聴に際しては、番組内のナレーションから把握できる内容と視聴した感想を記入するための用紙を作成して配布し、授業後に回収した。現在、島の長老となっている「おじい」「おばあ」の37年前の姿がTV画面に映し出されると、生徒は驚きの声をあげていた。

この単元は計6時間、授業を行ったが、その最終授業では、二種類のプリントを配って実習の成果をまとめさせた。一つは、舩そのものと小宝島特有の舩事情について、問いの項目を5つ設けてそれに答える形で記入させ、もう一つには、5つの旧港を観察した印象を改めて問い、加えてそれぞれの旧港について、授業や聴き取りによって知り得た成果を記入させた。

かつての小宝島の舩作業

島の方々の話を総合すると、舩接岸時代に利用する頻度が最も多かった港は「湯泊」（小宝島から沖合停泊の村営船に渡す舩は、常にこの港に用意されていた）で、反対に最も使う機会の少なかった港は「セド一の泊」であった。同港に至るサンゴ礁の岩場の道は、全く舗装されておらず、この点、同じ岩場でもコンクリート舗装の跡が残っている「中西の泊」とは対照的であった。なおこの5港は、舩による通船作業が廃絶する直前に利用されていた港であり、さらに時間を遡れば、これら以外にも舩の接岸港は存在したようである。舩時代のことを教えてください島の方は、その話をする雰囲気、舩作業が非常に危険であったことよりも、舩作業を通して島民がよく結束していたことを懐かしく思い起こしている風であった。中には「できることならもう一度、舩作業をやりたい」と話す方もいた。一方で、かつての舩接岸時代を知る村営船の複数のベテラン船員は、かつての舩作業の際に沖合に停泊中の村営船で釣りを楽しんだり、また自ら進んで舩に乗り込んで島に行き、接岸港で島民による湯茶の接待を受けるのが楽しみであったりしたこと等を懐かしんでいた。

授業実践の反省

私にとって「小宝島の港」の授業実践は、これまでの教員生活の中で、その教材開発に最も時間と労力を注いだといっても過言ではない。既述のように、この教材開発にあたって事前に2泊3日で現地を下見して、地域の方々からヒアリングを行い、いったんそれを持ち帰って教材をつくり、再び現地に赴いた。また現地に出発する前日(9月6日)、兵庫教育大学内の一教室で、本研究会の成員を中学生に見立てて、模擬授業を行った。

本単元の最初を飾る本授業は、生徒と共に島内の旧港を巡見する前の「導入」として行ったが、実習生として初対面のその日に当該授業を組んだことから、生徒との信頼関係を築きながら、本単元を学ぶにあたっての動機づけをする必要があった。しかし生徒たちにとっては、初対面ゆえに相手の話をよく聴いてみよう、という側面があり、私にとって初めての中学生相手の授業ではあったが、かえって楽しく進行することができた。私自身、生徒にここまで徹底して発問した授業は、過去に経験がなかったが、やはり授業中の「発問→回答」のやりとりは、その都度、生徒の理解度や参加意識を確認できるという意味で、素直に面白かった。私がこれまで接してきた高校生とは異なり、今回の対象は中学生であったので、より丁寧に授業を進めようと考えて、発問を多用したのであった。実際、授業展開と発問のテンポは、本研究会の大学院生を相手に行った模擬授業でも好感触を得ていたので、本番でも概ねこの線に沿って、発問を多用したテンポのよい授業を展開した。ただしこれは、生徒数3名という極端な少人数ゆえにできたことかもしれない。

本授業は、ビデオ録画した。後日、その映像を改めて確認すると、従来高校生対象に行ってきた授業に比べて、私自身、個々の生徒の顔を覗き込む機会が多かったことに気づいた。おそらく高校生の授業以上に、笑顔を振りまいていたのではないかと思う。それと同時に従来とほぼ変わらず、高校生を対象にしたようなテンポで話していた。少なくとも指導教諭の先生が、生徒の反応をじっくり確認しながら、ゆったりと話しを進めていく手法とは、大きく異なっていた。

授業終了後すぐに、受講した3名に授業の感想を口頭で求めた。これに回答する際の彼らの雰囲気は、何よりも本授業の印象を率直に反映している。これを言葉で描写するのは難しいが、コメントと共に、以下に掲げておく。

- A「感想ですかあ。(少し頭を傾けて真剣に考えてから) 知らないことが多すぎました。」
- B「(黒板に貼ってある教材をボーっと見てから、我に返ったように) 面白かったです。」
- C「(Bのコメントを模倣するように、笑顔で) 面白かったです。」

私自身、自分の授業を録画したのは、鹿児島県を退職して以降は初めてのことであった。素直で率直な気質を残しながら、一斉講義形式の授業にも慣れている少人数の中学生を相手に授業を行い(極めて授業をしやすい好条件であった)、その授業をVTRで再点検することにより、多数の人間を対象に情報を伝える「話し手」としての自分自身のスタイルを、冷静に見つめることができた。「何を伝えるか」と共に「どのように伝えるか」の意義を体験的に確認することができたという意味で、私には貴重な研修機会であった。これはやってみた者でないと、絶対にわからないであろう。

この円滑な授業進行の土台には、私の指導教諭の先生が、日頃の授業を通して生徒たちに「授業を受ける姿勢」を丁寧に指導してきた実績があった。実習期間を通して、いつもこのことを感じながら、授業をさせて頂いていた。

3. 研修全体を通して

(1) 研修内容

実習期間中、実習生として関わる事が可能な正課活動は、ほぼ全て、関わらせて頂いた。教科指導は中学校一年生の社会科に加えて、二年生の社会科（歴史分野）を担当し、日清戦争、帝国主義、日露戦争の授業をした。また中学校道徳の授業も担当した。

このほか、中学校二学年合同（6名）の学活、小中学校合同（9名）の体育、音楽、給食にも関わった。体育は、10月6日の運動会に向けた一輪車やソーラン節の練習が、ちょうど始まった時分であった。私は、体格と体力の大きく異なる小学生と中学生が、体育の授業を一緒に行うというイメージを、実習に臨む前はなかなか抱けなかったが、このような体力差があまり出ないものを運動会の種目（演技種目）に取り入れていることに、とても感銘を受けた。当然、走力や力技を競う競技だけでは、体育の授業も運動会も、成立しないであろう。しかし一輪車は意外に奥が深く、年代に関係なく練習をしないと全く上手にならないし、運動会で集団演技をするに際して、ある程度の水準まで乗れるようにならないと周囲に迷惑をかけてしまうことになる。ある程度上手く乗れる者にとっても、テクニカルな個人技を披露する場が集団演技の中に設けられていたので（これは「小規模校の強み」である）、本人の意欲次第で、個人としての目標をいくらか高い所に置くことができた。つまり短距離走のように年齢間の体力差があまり大きくは表れない前提があつて、それを踏まえて、小学生・中学生に関係なく個人として頑張らないと、周囲に迷惑をかけることになるという雰囲気があつた。私はこの構造を理解するにつけて、率直に、「上手いことできているなあ」と感心してしまった。

実習期間中の学校行事は、島のお年寄りを講師として招いて実施した「なわなひ練習」（9月12日）、夏休みの宿題作文を発表する「読書感想文発表会」（9月15日）、休日ではあるが地域の方も交えて学校周辺の清掃作業と空き缶回収をした後に、校庭でレクリエーションを行う「子ども会」（9月16日）があり、このほか地域行事として「敬老会」（9月18日）があつた。いずれも恒常的な地域と学校とのつながりを感じさせる行事であつた。

このほかの特別活動としては、同じく児童・生徒9名が一堂に会した児童生徒会活動「小宝タイム」（9月14日）、そして「教育実習生お別れ会」（9月19日）があつた。前者は、まず特別活動室に会して清掃時に使用している反省カードの内容を検討し、その後、外庭でプランターへの苗植えを行った。後者は、台風接近による実習期間延長のため、当初予定を延期して開いてくださった。



体育授業（運動会に向けた一輪車練習）



読書感想文発表会（9.15）

放課後の児童・生徒は、いったん帰宅して自分の荷物を置いた後、再び学校にやって来ていた。そして18時30分まで校庭で遊んでいたが、私の実習期間中は、運動会の応援練習に充てられる日もあった。またそれ以外の日は、運動会に向けた長縄跳びや一輪車の練習をしていた。時に教職員が主導して関わる時間帯もあれば、正課の授業と区別して、補助的に関わっている時間帯もあった。いずれにせよ、大半の教職員は子どもたちが帰るまで校庭で子どもと関わっていて、自身のデスクワークは、その後に取り掛かっていた。当然、教職員は職員室で遅くまで仕事をしていた。

この放課後の校庭には、日によって、島内に2名いる未就学児（2歳児と3歳児）が母親に連れられて遊びに来ていた。教職員はこの子どもたちをよく知っており、声をかけながら一緒に遊んでいた（島内には、幼稚園や保育園が存在しない）。僭越ながら、私も一緒に遊んだ。私には、小学生以上にこの幼年世代の実態や発達段階がわからなかったのも、これを契機にもう少し知っておきたいと思い、兵庫県帰着後ただちに手続きを行って本学附属幼稚園（兵庫県加東市）に一日実習生として関わらせてもらった（9月28日）。

実習期間中、瞬間的に何度か「追い詰められた」経験もある。島の総代に「ハブが出るから気をつけてね。」と横で何度も注意されながら最高峰の「竹の山」に登っていた道中しかり、オリジナル授業の巡見に出発するその日に、生徒の引率でお借りする予定の教頭先生の自家用車がMT車であることが判明し、出発直前の昼休みに、教頭先生ご自身に助手席に付いて頂いて島内一周道路を試運転したことしかり（教習所を卒業してから、ずっとMT車を避けてきたが、このときは子どもの安全が懸かっているのも絶対には逃げられなかった）、さらには9月14日（木）午前9時30分の村内放送で、同16日（土）の定期便欠航が伝えられ、当初計画の通り離島することができなくなった瞬間しかりである。「今になって思えば」であるが、これらは皆、よい思い出である。当然のことながらこの度の実習に臨まなければ、このような極度の緊張状態は体験できなかったであろう。

（2）研修を終えて

少人数校の長所

少人数校は、確かに、子どもと教員が一对一で向き合う機会に恵まれているが、実際には、大人の目が行き届きすぎるというマイナス面も、あるのかもしれない。このことは、もう少し長く現場を体験しないと、はっきりとしたことはわからない。また子どもの立場からすれば、少人数ゆえに大勢の同級生と切磋琢磨する機会が極端に限られているので、やがて高校進学などで島を離れた後に、同世代の集団の中で生きてゆくことの不安を、各自が応分に持ちあわせているように感じた（在籍者全員が、都市部で学校生活を送った経験を持っていた）。しかし小宝島分校の子どもたちは、同世代間の競争や学年別のタテ社会とはまるで無縁のように、互いにとっても仲がよかった。既述のように、中学生は一・二年生の計6名で同一HRを形成しているが、下級生が上級生に敬語を使うことはなく、授業や行事等で何か発表する機会があれば、必然的に、全員にその機会が与えられているので、校内には常に自分の「居場所」があった。加えて毎夕、島内放送で「夕読み」が行われ、9

名の児童・生徒が日替わりで、分校に隣接する離島住民生活センターから国語の教材を朗読していた。つまり島内の住民は毎日、少なくとも島内放送を通して子どもの声を聴いていた。子どもは校内にとどまらず島内でも、一人ひとりが大きな存在であった。

理想郷的イメージ

自然豊かな島の少人数校では、恵まれた自然環境の中で教師と子どもが常に一対一で向き合えるのではないかと思い、当初は、どこか牧歌的な教育風景をイメージしていたが、実際の現場は、日々の授業と生活指導、中期的な行動目標となる学校行事や地域行事の準備等で忙しく、教育者としてのスキルや責任の重さ自体は、都市部の学校と何ら変わらないと感じることの方が多かった。しかし今ふり返ると、時間が経てば経つほどに、実習で過ごした時間が美化されてしまい、再び実習前の理想郷的なイメージがついてまわるようになってしまっている。矛盾するようであるが、これは正直に告白せざるを得ない。実習中に撮った写真の背景には、常に小宝島の豊かな自然が写り、そこに写っている人びと、特に学校関係者と交わした話の内容を何度思い返したことであろう。学園祭準備の際、何かと実習中の写真を目にする機会が多かったが、そのとき、「もう時計の針は、戻らないのだ…」といったことを考えている自分がいた。既にその段階で、実習中に苦労したことは（記憶としては残っていても、感覚的には）完全に忘れてしまっていて、小宝島で過ごした時間が全体として美化されていた。当然、これは、責任から解き放たれた者の勝手な夢想である。

小宝島への謝意

子どもたちとの出会いは、私にとって大きな財産であった。高校教諭の私には学校現場において、教員の立場から、日常的に中学生や小学生とふれあう機会はいまだ無かったので、その意味からも学ぶことがとても多かった。また私にはこの世代の発達段階そのものがよくわかっていなかったため、実習前に神奈川県及び兵庫県の小学校や中学校の二つの校種の授業をそれぞれ複数回視察したが、やはり見るのと、責任を伴って働きかけるのとでは、全く意味が違った。例年、中学校を卒業した、ある程度「できあがった」子どもたちを迎え入れている高校現場の人間にとって、それまでの学校現場における教育プロセスに体験的にふれられたことのみを以てしても、本企画は私にとって大きな意義があったと自負している。彼らにとって長い人生の中の一時期、小宝島で過ごした時間が将来的にどのような意味を持つのか、とても興味がある。在籍9名の前途を、心から期待したい気持ちである。

私は現職の高校教諭として、過去に教育実習生を3名、指導してきた。教育実習生にされたら困ることを体験的に知っている私にとって、このたび私自身が実習生として赴くこと自体が、受入れ先の小宝島分校にとって大きな負担であったことは、私なりによく自覚していたつもりである。それでも短期間の実習とはいえ、職員室に居所を用意して頂き、子どもたちの教育に必要な情報を交換しながら、有益な助言をして頂いた小宝島分校の先生方に、重ねて感謝申し上げたい。

おわりに

実習生 + 運営者としての研鑽 = 「選手兼任監督」

本研究会の活動の本旨は「実習生としての実践」であり、本来、本研究会の「運営」は副次的なもの（になるはず）であった。したがって、私自身が全体の運営からある程度自由になり、一人の実習生として実習島（小宝島）に入って現地の方々に直にふれながら、自らのパーソナリティーで勝負をしていくことは、率直に楽しかった。

思えば、本研究会を立ち上げてから本実習に臨むまでの間、私は日常的に、「これはもしかしたら、小宝島での実習に役立つのではないか」という尺度を持って、あらゆる物事を眺めていたような気がする。その実際の行動は、島歩きに適した動きやすい服装や靴、中学生対象の授業を成功させるための教具及び教材製作用工具の購入や、自己紹介で披露するための兵庫県内の写真撮影等、目に見える物理的なモノの準備から、私にとって異校種である小学校や中学校の参観、へき地校や離島の学校への赴任経験がある本学院生からのヒアリングといった実践的な自己研修まで、多岐にわたっていた。またトカラ列島以外の離島（20 島）へも足を運んで、日本の離島の実情を少しでも総論的に考察しようと努めた。

大学院の同級生への謝意と、研修機会としての意義

実際、同級生である小学校及び中学校教諭の院生とは、私自身、それまでも各自の専門校種の具体的な実情や課題についての情報交換を相応にやっていたつもりでいたが、正直なところ、自分が異校種の現場に直接入って実習することを前提に、異校種の教員からの情報を吸収しようとすることは、それまでの情報交換とは全く次元が異なっていた。本企画を立ち上げてからは、私の方から、半ば「切実感」を伴って同級生諸氏から情報を引き出し、実際によくそれに応えてもらっていた。既述のように、私は実習中に、全く経験のない中学校道徳の授業をさせてもらったが、このような専門外教科の未知の授業にチャレンジするよう、私の背中を強く押してくれたのは、同級生の小学校教諭であった。このとき私は、「専門性に拘泥する高校教員は、弱い。」と感じると同時に、複数教科の授業を日常的にこなしている小学校教諭を、とても眩しく感じた。実践的な情報の提示や助言だけでなく、様々な局面で、たった一人の現職教諭のトカラ研究会メンバーとして奮闘していた私を励ましてくれた、同級生である現職教諭の院生諸氏に、心から感謝申し上げる。

学生時代に、全国的には決して多くはない「へき地教育」及び「少人数教育」の現場を経験しておくことの意義に加えて、現職教諭にとって「異校種の学校現場」を体験することの有意義性も、最後に是非、強調しておきたい。多大なエネルギーを要するが、この業界で仕事を続けていくにあたって、絶対に必要な体験である。

本当はその物事をよくは知らないのに、つい評論家的に達観したようなことを口にしてしまうズルい部分が、年を重ね、知恵が付いていくにつれて、多かれ少なかれ誰の中にも芽を出してくるのではないだろうか。このズルさが、徐々に自らを蝕んでいることを自覚していた私にとって、この度の研修は、これを少しでも克服して、（第三者的立場ではなく）当事者意識と責任感を持って、実践的な行動力をより向上させるための、自らに課した試練であったような気がする。